
真っ白け

頬白丼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真っ白け

【Zマーク】

N1938B

【作者名】

頬白丼

【あらすじ】

文化祭に展示するモニュメント。朝来たらなんと真っ白に塗られてしまつた！作業は再開出来るけど、犯人を野放しにしてたら、また白くされてしまうかも。なんとも不思議に中途半端な出来事を、新聞部が調査する。

(前書き)

この作品はフィクションであり、実在の団体、人物とは関係ありません。

夏休みも終盤になると、七星高校のいたるところから金槌の音が聞こえてくる。一学期が始まつてすぐ、文化祭というイベントがあるからだ。

ところが、そのような体育会系の喧噪とは無縁な部屋がある。窓という窓を、ドアというドアを全て開け放つたその部屋では、男女一人ずつ計一人という団体として最小限の人員が、パソコンのキーボードを必死に叩いてくる。もちろん金槌ではなく、左右十本の指で、だ。

「暑い……」

男女の女、若干児童よりの少女が愚痴をこぼす。扇風機一台をフル回転させているといふのに、体育着といふ通気性のいい物を着ているのに、だ。

「……ゴルゴムの仕業か？ 地球温暖化作戦、とか」

男……というか少年の方が言つ。地球の温暖化は確かに進んでいるが、決してゴルゴムの仕業ではない。人の業だ。

「……大丈夫リュート？ なんでもゴルゴムのせいにすると、末期らしじよ？」

「そなのが。なんの末期かは知らないが……キングストーンを埋め込まれたりはしていないから平氣だ」

リュートと呼ばれた少年は、そう言つておどけてみせる。暑い中、集中をずっと続けていると参ってしまうため、このような会話を休憩のように使つている。

「週刊で新聞発行して、文化祭も一般向け配布するつてアナウンスしておくと、文化祭前にクラスの手伝いしなくても、誰にも咎められなくていいね」

「全校で一人だけ、つて有名だもんね、新聞部」

「その代わり、『キツそう』って、誰も来ない。まあ、変なのが来

られるよりマシだが

「リュートより変な人はいないんじゃない？」

「マサキがいるだろ」

「えーっと、ドングリが背を比べながら五十歩か百歩かをバカにしあつて、目やにが鼻くそを笑つてる感じ？」

「……ツクシ、回りくどい言い回しで失礼なこと言つな」

ツクシと呼ばれた少女は“そつかな？”と言わんばかりだが、廊下からの声が思考を遮つた。

「お、サクリューいるじゃん」

声の主は、ズカズカと部室に侵入してくる。“サクリュー”は少年、桜井龍人さくらい りゆうじんのあだ名であり、この名で呼ぶ者は一人しかいない。

「マサキ、ノックくらいし」

噂をすればなんとやら。件の“マサキ”こと一条正樹じょうじょう まさきが非常に目立つ。制服のズボンをはいているが、至るところに青やら緑やら、ペンキらしき汚れが多くあるので、ビリであつても迷彩効果はゼロだ。

「あ、ゴメン、サクリュー」

正樹は部室の外に出て、引き戸を閉める。

軽く二回、ノック音が聞こえた。

「カギは開いてるぞ、マサキ」

引き戸が開き、正樹が部屋に入る。

「オーッス！ サクリュー、よくオレだつて解つたなあ

「ノックの音の間隔とか質、音程が独特だからね

「つてかさつき入つてきただじゃん！」

ツクシのツツコミはもつともだが……。

「で、なんの用だ？ マサキ」

龍人は話を進める。なんとなくツクシの目が三角形に近づいた感じだが、ツツコミ共々無視した。

「体育館開けて」

「先生にカギ借りろ」

「カギがない」

「ならどうして俺だ?」

「体育館に侵入出来るから」

「まるで俺が泥棒みたいじゃないか」

「違法でもいいよ。オレが許す」

「マサキが許しても警察が許さない……つーか

「つーか?」

「そこにカギがあるから貸してやる」

龍人が指差した方に、校内の半のカギが置いてある。校長の許可を得てコピーしたものだ。

「なんでそんなに?」

「取材の度にカギ借りるのが面倒だから。まあ、校長室と職員室、各種教科室と事務室に……あと更衣室はムリだつたけど」

「なんだ。試験問題とかゲットできると思つたのに」

「……そういうのを防ぐためだ」

むしろ、全てのカギが揃つていて安心出来ない。

「マサキくん、体育館で何があったの?」

一段落したところで、ツクシが訊いた。やはり、興味を引く対象だ。

「文化祭で展示するモードメントを体育館で作つてる。作業しに来たら、カギがないってことで、こいつして借りに来た。ツツシイが好きそうなイヴェントは無いよ」

春日ツクシ(かすが つくし)を“ツツシイ”と呼ぶのもまた、正樹だけだ。

「なーんだ」

「ま、平和でいいじゃないか」

「そだね」

「じゃサクリュー、カギ借りてへばぞ」

「ああ、他のヤツに渡すなよ」

「なんで?」

「無くされたると困る」

「りょーかい」

そう言つて、正樹は部室から出ていった。廊下から響いてくる足音から察するに、全力疾走だらう。部室から体育館までの距離を考えると有酸素運動が望ましいが、“マサキなら無酸素運動でも行ける”と、龍人は考えてしまう。

「マサキだから一年五組か……クソ！『モニユメントの展示』じやコンセプトが解らん。五組に椎名くんと高梨くんがいるから、少し楽しみだつたんだが」

龍人はパソコンのディスプレイを見ながら言つ。一学期開始と同時に配布する予定の“文化祭特集”的作業をしているので、ちょうど表示されているのだ。

「去年の文化祭の展示部門、同点で賞を分け合つてたもんね」
昨年の文化祭。椎名雄一を中心とした一年一組と、高梨文也を中心とした一年二組がモニユメント制作で激突。互いにしのぎを削り、高めあつた結果が、ツクシの発言通り同点。

その一人が、今回の文化祭で手を組む。

「だから楽しみだし、盛り上がるから良いけど……なんか陰謀が見え隠れするクラス分けだよな」

「そーね。ライバル同士が手を組むなんて、ゼータみたい」

「そうだな。まあ、そんなプレッシャがあるから、作業の開始が早いのかもしれないな」

「あ、そーいえばもう作業始めてるんだね」

「そう言つツクシのクラスは……『メイド&バトラー喫茶』かメードと執事が給仕をする店だね。準備はいいのか？」

「いいんじゃない？まあ、準備あっても行けないけど」

結局、どんなイベントも新聞部は新聞部優先。他にいないから仕方ない。

「それにしても、この企画よく通つたな。確か『メイド喫茶』って風呂法やらなにやらで、十八歳未満は立ち入り禁止とか……調べて

「ないから判らんが」

「企画通すためと、ネタのために男子がメードさん、女子が執事さんのカツコをするから平氣みたいよ」

「……それなら良いのかもしかんが、どの層に訴える商売なのか見えないな……」

「……ほら、女装美男子萌えとか、男装つ娘萌えとか……」

「……まあ、異様な空間にならないことを祈つておくよ」「すると、廊下から、やはり全力疾走の足音が聞こえてくる。

「ねえリュート。これ、マサキくんじや……？」

「『力ギが見つかったから返しに来た』といつ展開希望

やがて足音が、開け放たれた引き戸に達すると、一瞬だけ正樹の姿が見え、そして全力疾走の勢いそのままに引き戸が閉められた。派手な音をたて、部屋が揺れたような感覚が襲いかかり……。

軽く二回、戸を叩く音。

「開いてるぞ、マサキ」

「つて今閉めた！」

「よくオレだつて解つたな」

「ノックの間隔や音の質、音程が独特だからね」「つてか一瞬見えたし！」

律儀にもツッコミを入れるツクシ。だが、龍人はそれを無視する。「で、力ギを返しに来たのかな？」

「違う違う。大変な事が！」

「そうか、大変だな」

「リュート、訊かなくていいの？」

龍人は黙る。普段なら“大変な事なら用件を先に言え”と言つところだ。しかし、その“大変な事”に龍人を巻き込もうと、正樹が全力疾走をしてきたのは明白。

龍人としては、その思惑通りに巻き込まれるのは、面白くない。だから軽い抵抗として、受動的な巻き込まれ方を選択した。

しかし、結局は“軽い抵抗”的範囲を出ない。

「モニュメントにイタズラされたんだよ」

正樹が言い出すのが、ほんの数秒遅くなつたくらいだ。

「……ゴルゴムの仕業か……」

「それは違う」

ツクシがツツ「ミミを入れて、調査開始ということになつた。

龍人とデジタル一眼のカメラを持つたツクシ、そして正樹の三人が体育館に着くと、四人、生徒がいた。全員二年五組の生徒で、正樹と同じく、文化祭のモニュメント制作作業のために登校して来たのだろうが……どうもケンカのようみえる。

その中心は、件の椎名雄一と高梨文也。

雄一はデザイン性よりも生産性を重視したメガネをかけている。放つておいたらこうなつた、と言わんばかりの髪は、耳も目もかかるくらい長く、メガネの着脱が少々大変そうだ。連日の快晴にも、あまり日焼けしておらず、病弱な感じがあるが、背の高い男子生徒が必死になつて止めるくらい、勢いよく文也に飛びかかるつとしている。

文也は対照的に、メガネはかけていない。髪は短めで、スレンダではあるが、不健康ではない印象だ。まともにケンカをしたら文也の方が勝つだろう。しかし、ケンカをさせないために女子生徒が止めている。

慌てて駆け寄つた龍人たちに気づいたのか、雄一を羽交い締めにしている男子が口を開く。

「ちょ……この二人止めてくれ！」

それを聞き終えるかどうかという頃には、龍人が口を開いていた。「ケンカするのは勝手だが、後で出来ることは後でやつてくれ。俺はケンカの仲裁に来たんじゃない」

穏やかに、静かに、そしてハツキリと。エキサイトしている人間

には、怒鳴りつけるより効果がある。

「つづけで……連れてきたぞ、新聞部」

ケンカが収まつたところで正樹が言つと、雄一を羽交い締めにしていた男子生徒が龍人に向き、口を開く。

「なんか、新聞沙汰もいいトコだな。あんま変なこと書かないでくれよ」

内容は少々問題だが、口調はそうでもない。

「そんなこと言わないで。新聞部さんだつて、夏休みに登校しているくらい忙しいのに、わざわざ来てもらつたのよ?」

女子生徒がマジメに返した。だが、新聞部の呼称は“新聞部さん”だ。会社の営業みたいな呼び方だが、去る高名な神主にして陰陽師の古本屋が、古本屋の屋号で呼ばれているような物と考え、特にツツコミは入れない。が、この先もずっと“新聞部さん”と呼ばれるのは何かと不便だし、龍人とツクシのどちらを示しているのかが解らない。

ということで、その場の全員に名刺を渡した。もちろん、ツクシと正樹以外の、だ。

「さくらー……たつひと?」

「りゅうと。と読みます」

「ああ、ごめんなさい。私は……」

「ああ、平氣です。この場にいる全員、名前知つてますから」

先ほど“新聞沙汰云々”と言つたのは松平隆幸まつだいら たかゆきで、特に部活動に所属はしていない。髪を茶に染めたり、ピアスをしたりと、見た目上はチャラチャラしているが、夏休みにもかかわらず文化祭の準備に出席するなど、好感が持てる。この様子では、“新聞沙汰”発言も、ただのジョークだろ?

ちなみに、“松平”は、徳川家のイントネイションではない。

「そつか。じゃあ現場を見て貰おうぜ」

その隆幸が口を開く。なかなか冷静に物見ることが出来るようだ。見た目とのギャップが、より顕著に感じられる。

「そ……そーだつたわね。桜井くん、見て貰える?」

ポニー・テイルにした女子生徒、先ほど“新聞部さん”と呼んだ彼女が言つ。

身長が平均より少々高めのこの女子生徒は、せきやま なつき 関山夏希。いまは指定のスカートにポロシャツを着ているが、作業中は体育着か何かを着ているのだろう。スカートにペンキなどの汚れが見当たらない辺りから、それが伺える。

「じゃあ、現場を見てみますか。ツクシ、カメラ」

「……もう撮り始めてるけど?」

先ほどからツクシの姿が見えないと思つたら、すでに現場で写真を撮つていた。図らずも、龍人の名刺を陽動にして、ツクシに現場を撮影させた形になる。

「……ツクシ……『気が利く』の域を出て、軽くやりすぎだぞ

「ん……まあ、結果は一緒だからいいんじゃない?」

ツクシはまったく悪びれもしない。

「……スマン。事後承諾になるけど、撮影していいかな?」

「いいんじやね? 他のクラスのヤツに見せなきゃ」

隆幸が同意したことについて、他のメンバは特に文句を言わない。これでツクシは大手を振つて撮影が出来る。……気にしているのは龍人だけかも知れないが。

「じゃあ、俺も見させて貰うよ」

とは言つても、否が応でもさつきから田につく。結構広めに展開されたブルーシートの上に、直径で一メートル位の半球が数個。どう考へても、これが“モニュメント”だらう。

「一見何も……ああ、そういうことか」

モニュメント制作の作業中に“大変なこと”が起きたのだから、つづきり破壊されるなどのレベルだと、龍人は思い込んでいた。だが違う。

このモニュメントは、作業途中にも関わらず、真っ白なのだ。

それでは正樹のズボンについていた塗料の説明がつかない。

「ツクシ、それ、全部白に塗装されてるのか？」

「うん。近くで見ればすぐ解るよ……ってことだから、別に推理する必要なかつたんじゃない？」

「違和感を覚えたその直後に違和感の正体が解つたんだから、不可抗力だ」

言いながらモニコメントに近づく。確かに、近くで見れば白に塗装されているのが簡単に解る。また、白塗装前の青が見える箇所もあるので、イタズラの内容はこれで間違いない。

「つまり、白に塗装した犯人を探せと？」

「マサに訊かなかつたのか？」

隆幸のセリフはもつとも。だが、龍人はあえて訊かなかつたし、正樹は正樹で詳細は言わなかつた。又聞きによる、第三者の偏見や勘違いの情報を遮断するためである。

「こんだけ塗るには結構な量必要だが……白ペンキ、そんなにあるのか？」

「白はあるけど、うちらのペンキは手付かずだね」

「……となると、被害はこれだけか」

「うん」

夏希が首肯する。その他誰も異議を唱えないでの、その通りだろ

う。

「……つまり、白く塗られただけだな？」

「うん」

同じく。

「……半端だな」

半端。一言でこの被害を評するなら、このほかに妥当な言葉は見つからない。

「半端？」

夏希が聞き返す。もつとも、他の連中も似たような反応だが。

「仮に妨害だとしたら、復元不能なほどに壊すなりした方がいい。

その方が作業時間だつて早いしな。だから、犯人の心理として、時

間がかかるつてダメージの少ない『塗装』を選ぶとは、とても思えない

「じゃあ、犯人は？」

何も調べていらない段階で、夏希が質問する。

「誰かは解りません。どんな人かも解りません。ただ、目的は妨害ではないと思います。これは『塗装』されます。ただ真っ白にするのであれば、ペンキをぶちまければいい。だが実際は、ムラや欠けはあつても、ハケでキレイに塗られている」

「じゃあ、犯人は妨害でも何でもなく、白く塗つたつてことか？」

正樹が訊き返す。

「俺がやつたんじやないから解んねえって。つていうか、犯人を探せばいいのか？」

「がんばれサクリュー！」

「……軽く言つてくれるな」

「『輝く最強展示物大賞』獲つたら、独占インタビューしていいから」

「学校の広報誌のインタビューは受けろよ。それに、賞の名前も違うし」

「『輝け』だつた？」

「いや、もう全面的に」

「そつか。まあいいじゃん」

「そうだな。いま問題なのは犯人か。作業の再開は出来るけど、犯人を野放しにしてたら、またリセットさせられるかも知れないからな」

龍人は関係者の証言を求め、メモ帳に書き留める準備をした。

「皆さんの、昨日の行動を教えて下さい」

「俺たちを疑つてんのかよ？」

「形式的な物ですから、『ご協力お願ひします』

と、それ自体が形式的なやり取りをして、証言を促す。

「昨日このメンバで作業してましたか？」

「そう……だな」

少し考える素振りをした後、隆幸は答えた。他に異議を唱える者はいないので、その通りなのだろう。

「他のクラスメイトは何もしないのか？」

クラスで参加しているイヴェントで、クラスの一部の一部しか作業していない。やる気がないのか、文也と雄二に任せっきりなのか。「夏休みだし、『來い』って、強く言えないし……ムリに強制して、ジャマな連中が来るのはイヤだね

隆幸の発言は、どこかで聞いたような考え方だ。

「つまり、自由参加にしたら、このメンバが集まつた、と」

理由は何であれ、作業に参加している生徒は一条正樹、松平隆幸、関山夏希、椎名雄一、高梨文也の五名だけであることは確かのようだ。

「んじゃ、昨日の行動……特に下校のときだな。教えてくれ」「細かいことは覚えてないけど、いつも五時位に先生が来て、下校しなきやいけないってなるよ。それから、道具を片付けて戸締まりをして帰つてるよ

答えたのは夏希だ。

「それぞれの係は決まつてるのか？」

「片付けはみんなでやるけど、カギは一番早く来たヤツが借りて、そのまま持つて……終わつたら職員室に返しに行く。だから毎日誰が何するは決まってないけど、昨日のカギはナツだつたな」

隆幸は重要な情報を教えてくれた。少なくとも昨日は、夏希がカギを管理していたということ。

「いや、待てよ。カギはみんなで返しに行つたんだぜ？ 先生も職員室の戸締まりしなきやつてんで、一緒にいたよ。体育館だつてドアが全部閉まつてるのは、昨日帰る前に確認したし、今朝も全部閉

まつてた

自分の発言によって、夏希の立場を危うくしてしまったからなのか、隆幸は少々慌てた感じで弁護する。

「つまり、昨日の下校時に力ギは職員室にあったが、今朝は無かつた。これは確定だね？」

「ああ。確定だ」

ウソではないだろう。実際、正樹が新聞部に力ギを借りに来ていた。

「今朝は誰が一番に来た？」

「オレ」

「マサキかよ」

「誰もいなかつたから、力ギを借りに職員室に行つて……それで力ギがないから、誰かが借りたと思って体育館に戻つた。そしたらマッペイとナツキイがいて……やっぱ力ギがない。だから蹴破ろうとしたんだけど、止められた」

体育館の扉は鉄製。正樹はこれを蹴破らうとしたのか。

「……マサキ……お前、赤心少林拳使えたつけ？」

「何だそれ？」

「鉄壁を碎くキックだ」

「気にしないでマサキくん。フィクションだから」

「ツクシ……鉄扉を蹴破らうという発想も充分にフィクションだぞ、この男」

「後で考えたら、弁償高そうだもんな」

「ああ、破れるのは確定なんだな」

「しゃーないから、マッペイとナツキイと話して、サクリューんとこに行つたんだ」

「マサキくんストップ！　『マッペイ』と『ナツキ』って？」

ツクシが割つて入る。龍人は、それらが誰のあだ名かは解つていた。が、勘違いという可能性もあるので、黙つている。

「隆幸と夏希。ついでに雄一が『イナコウ』で、文也が『タツカン』

ね

「……そこまで訊いてないけど、言つてくれて助かったよ」
雄一も文也も、どちらも訊かなければ解りにくいあだ名だ。特に、
“いいな”から“いな”を採用するとはとても思えない。普通なら
“稻垣”や“稻田”などのあだ名に使う。

「まあ、それはいいとして、椎名くんと高梨くんは何時頃来た?」「

「僕は……ついさっき……」

今までずっと黙っていた雄一が、ようやく口を開いたと思ったら蚊の鳴くような声。去年、彼にインタビューをしたときも似たようなもので、最初は別の生徒がでしゃばっていた。そのとき、始めはでしゃばりの生徒がメインだと思つた龍人だったが、取材で核心に触れていくにつれて、ようやく雄一がメインだつたと気づいた。龍人が気づかねば、手柄はでしゃばりの生徒に取られていたかもしない。

「あー大体俺と同じような時間だな。俺の前を歩いてたから同じく、ずっと黙っていた文也が言つ。声は元気だが、あまり外交的では無いのかもしれない。

「ん。声かけなかつたのか? ケンカはこの惨状を見てからだろ?」非常に些細なことだが、訊かずにはられない。一緒に作業をしているのだ。話しかけるくらい、しそうなものだ。まあ、二人ともあまり外交的とは言えないから、不思議でもない。

ところが、隆幸が口を出したことで、些細なことではなくなつた。「つたく。仲直りしてないのかよ」

仲直り。

仲直りと言つからには、今朝よりも前にケンカでもしたのだろうか。

「……これは譲れないよ……もう白くなつちゃつたけど」

「椎名が塗つたんじゃないのか? 僕の色遣いに文句つけてきたじゃないか」

解りやすい。芸術性の相違に因るケンカなのだろう。まあ、金銭

のトラブルを“音楽性の相違”としてバンドから脱退するメンバよりは、高尚な理由だが。今朝のケンカもその延長線上にあるのだろうが、相手を犯人扱いするのはいただけない。

「……お二人がケンカするのは勝手だが、そうやつて主観が入つて、冤罪から取り返しのつかないことになつても俺は知らん。が、どんなケンカか、くらいは教えてくれ」

「えつと……高梨くんが僕の担当の所の色遣いに文句を言つてきて……それで」

「俺のイメージでは全体が青なんだ。いきなり赤入れるなよ」

「だつたら最初から担当を半々にしないでよ」

「椎名がやりたいって言つたんだろうが」

「僕だつて僕の作りたいモノがあるんだ」

放つておくと手が出そうだ。とりあえずケンカの原因やいきさつ、内容まで解つたので、止めないと大変だ。

「バカにするな。ケンカまで再現しないでも解る」といささか問題のある仲裁だが、効果はあつた。

「二人とも妥協しないのはいいんだけど、他人の意見をまったく聞こうとしないで、なんか担当を好きにやつてる感じ」

と、夏希が説明するも、目の前にあるモニュメントはすでに真っ白。龍人は白く塗られる前のモニュメントに興味を覚えたが、それは白ペンキの下に埋没してしまつて、確認できない。

「……事件前の様子を見たいのだが」

「それならデジカメで撮つてたよ。展示してる隣で、制作の様子を流そうと思つて」

夏希はそう言つと、カバンからコンパクトなデジカメを取り出した。ツクシが使つているようなデジタル一眼ではなく、ファインダを使わないことを前提に「デザイൻされたような、液晶ディスプレイがいやにでかいモデルだ。

「昨日の帰りに撮つたのがコレ」

夏希はデジカメを少しいじつてから龍人に差し出す。ディスプレ

イには、青を基調とした半球やら、赤を基調とした半球やらが写っていた。それぞれ違ったイラストが描かれており、統一感もなければ、対照的でもない。評するなら、“すべてにおいて中途半端な駄作”と言わざるを得ない。

「文化祭前のために、新聞部はコメントを差し控えさせていただこう」「あ、逃げた」

ツクシはそうツッコミを入れるが、実際はそうではない。“ノーコメント”は、聞いた者に好きな解釈をさせる。それを制作者に言うことは、制作者が心の底で感じていることを、“他人からの忠告”という形で表面化させることができる。いわば魔法の言葉なのだ。“……俺のノーコメントの意味はおいといて……証言から解つたのは昨日はちゃんとカギを返却したこと。白く塗装されたのは昨日みんなが帰った後から、今朝までの間といつこと。昨日の作業中椎名くんと高梨くんがケンカしていたこと……か”

ケンカのくだりに、反応したのはケンカしている二人。

「ケンカしてたからって犯人扱いは……」

「そんなことで犯人扱いするかよ」

文也の言葉を一瞬で否定。当たり前だ。

「言い合いをしてる最中、カツとなつてペンキをぶちまけることはあっても、わざわざ忍び込んで塗装するとは考えにくい」

もちろん“考えにくい”だけで、その可能性もある。龍人は意図的に伏せたが。

「やはりカギになるのは体育館のカギだな。カギさえあれば、体育馆は簡単に侵入できる。それこそ、この学校に関係してない人でも、ね」

龍人の言葉の一呼吸後。その場にいる全員が、何かに気づいて……。

「ん? みんなどうした……あ……」

龍人は、その“みんなが気づいたこと”が何であるかに気づいた。

「……一番怪しいの、俺か……」

「……」

力ギは持つていっても動機を持つていらない。それどころか、今朝まで無関係だった龍人が塗装犯であるはずはない。

とはいえ、最悪に最悪が重なつて、さらに奇跡的な何かが起きると、自分が犯人であると言い出しかねない危うさ。それは無関係だつた今朝に比べれば、雲泥の差を持つていて。

「やはり力ギだ。正規の力ギがいまどこにあるか。昨日の作業終了時点から今朝までの間に、何かが起きてるはずだ」

力ギは勝手に動かない。返したはずの力ギが、返した場所に無いのであれば、誰かが持ち去つたと考えるのが自然である。そうでもなくとも、何かが起きているはずだ。

「もしかしたら、こうしてる間に力ギが戻つてるかも知れない。職員室をチェックしてくる」

龍人はそう言って、職員室へと向かおうとした。

「私も行くよっ！」

ツクシが手を挙げて主張するが、龍人が同行を求めたのは正樹。「だから私も行くつて！」

ピヨンピヨンと跳ねながら主張するツクシだが、龍人は一回、目で合図をするだけで、正樹と共に体育館を出る。

「いいのか？ ツツシイ放つといで」

「ああ。悪い言い方だが、見張りをやつてもらつ」

龍人がいないう間に、何か変な考えを持つ人間が出るかも知れない。そうさせないための牽制である。

「じゃあどうしてオレ？」

「さつき貸したコピーの力ギを持つてるから」

「……サクリュー……変なこと考えてるだろ？」

「いや、別に」

そういうしていふうちに、職員室に到着。ノックをして返答を待

つて、入室する。

「カギ借ります」

と、夏休み出勤ご苦労様な四十代独身の男性教師（数学科）に告げ、カギボックスを開ける。

カギボックスは、三段、キー ホルダを引っ掛けたフックが飛び出した物で、扉の裏にも同様のフックがついている。フックの設置が扉を閉めたとき互い違いになるよう作られているので、カギが向かいのフックに移動してしまうことはないだろう。

「お、なかなかグッドデザイン」

言いながら龍人は、何度も開け閉めをする。楽しいようだ。

「あと何回で飽きる？」

「もう飽きたから、本題だ。コピーを貸してくれ……じゃない！俺が貸したんだから返してくれ

「すぐ貸してくれよ」

龍人は体育館のカギのコピーを受け取ると、カギボックスに残っているカギと見比べる。

「何してるんだ？」

「体育館のカギが別のキー ホルダに付いてるかも知れないから、見比べてる。今朝だって、キー ホルダのプレートに『体育館』って書いてあるカギを探しただけだろ？」

「そりやサクリュー。さすがにカギのギザギザ見て『これが体育館のかギだ』なんて判るほどカギマニアじゃないからなあ。リローデッドに出てきたカギ職人なら判るかもしんねえけど」

「……ネタが古い」

そう言う本人が、先程言った“ゴルゴム”の方が十年以上古い。

“赤心少林拳”に至つては、二十年位だ。

「で、体育館のカギは見つかったか？」

「無いね。誰かが借りてるカギもあるが、問題なく使えてるなら……」

途中で言葉を切つて、龍人は考え込む。

……

「どうしたサクリュー。『問題なく使えるなら、確かめなくても体育館のカギは無い』って言いたいのは解るけど、途中で切られると思になるじゃないか」

それを聞いても、まだ考え込んだま。

「サクリューのバカ」

「おー俺は元気だぞ……って何を言わせる」

「言つたのはサクリュー。何考えてた?」

「ん。霧が出てきた……じゃなくて、ええっと……貸し出し記録に載つてなくて、ここに無いカギがあるかもしねん」

「ここに無いなら無いだろ」

「いや、そういう意味じゃなくて」

貸し出し記録……生徒がカギを借りるときに、日付と借りた時間。生徒の名前、どのカギを借りたかを記述するノートで、カギを返すときに返却時間を記述して手続きは終了する。ほとんど形だけの物で、記述しなくても持つていくことは可能だ。

「つて、一昨日の体育館のカギ、記録が無いぞ。誰が借りたか覚えてるか?」

「オレじゃないぞサクリュー。オレは借りたことないからな」

「……こついうのは性格の問題で、ちゃんと書く人は毎回手続きする。昨日は『関山夏希』って書いてあるね。だから、一昨日は関山さんじゃないと仮定して……」

すると、松平隆幸、椎名雄二、高梨文也のうちの誰かが、一昨日カギを借りたことになる。もちろん、正樹の可能性もあるが。

「あ……思い出した。一昨日はマツペイだつたな」

さらにさかのぼつて、記録なしで借りる人を特定しようとした矢先、正樹が思い出すというフェイント。だが、調べるより早い。信じれば、の話だが。

「松平くんか。書かない人なんだな」

「関係あるのか?」

「俺がよく言う[冗談よりは

「ところでサクリュー。新聞部のカギ……」

「え？ 無い？ 僕とツクシは「Pマーク」持つてるけど、オリジナルが無くなつたら大変……ってあるじゃん」

「あるよ。あるのにどうして部室開いてるのかな……ってね」

「ああ、そういうことか」

「どうして開いてるの？」

「一回言つたから教えてやりん……お、柔道場のカギ、記録無しで借りられてるぞ」

体育館の隣、体育科教員室や更衣室などがある格技棟の一階。そこが柔道場である。

「柔道部が困つてんじやねえ？」

「主な活動内容が、部室で菓子食いながらマンガ雑誌を読むという部活だから……困つてないだろうな」

「サクリュー決めつけるな。きっと柔道マンガ読んでんだよ」

「柔道マンガで得られる技術は、足でピアノを弾くくらいだろ」

「……宴会芸？」

「実写版では俳優さんがちゃんとやつてたぞ。特撮だが」

「……バカ？」

「一応、一世を風靡したマンガとドラマだが……脱線しそぎだ」

龍人と正樹が、ツクシ無しで会話をすると、脱線したまま戻つて

これなくなることがある。脱線させる犯人は、主に龍人だが。

「他には……視聴覚室と和室が記録なしで借りられてるな」

「もしかしたら、そのどれかのキー ホルダに体育館のカギがついてるかも知れないんだな」

「ああ、これから体育館のカギとそのどれかが似てるかどうか、見比べてみる」

「どうやって？ ここに無いものを見比べられるのか？」

「……マサキ、誰にカギ借りたか忘れてるんじゃないのか？」

「返したからな」

特に説明する気も起きず、龍人は黙つて、校内の半分のカギがあ

る部屋へ向かつた。

「新聞部の部室に行つて力ギを確認したら、柔道場の力ギと体育館の力ギは同じタイプで、パツと見じやあ見分けられない。念のため柔道場に行つたけど、柔道場は使ってなかつた。もしかしたら、体育馆の力ギは柔道場の力ギのキー ホルダについてるかも知れない」「マサキ……なんだその極端な説明口調は？」

「ん。マンガの一話で、こいつ説明するキャラ居るじゃん」

「居るけど要らん。が、そういうわけだ」

体育馆に帰るなり、コントのように全員に報告した。もつぱら、報告は全て正樹がやつたような物だ。

「ホントにそうなのか？ 柔道部で勝手にパクッてるだけかも知れねえじやん」

隆幸の指摘ももつとも。

「それはそうだ。でも、互いに『かも知れない』は、どちらも仮定。可能性を全て否定してたら、何も終わらない」

「そりだぞマツペイ。丁字路から子供が飛び出していくかも知れない運転。子供が飛び出しきたらすぐブレーキで、出てこなけりやそれはそれでいいじゃないか」

「例えが微妙だな。ついでに、法規としては『丁字路』じゃなくて『丁字路』だ。『十字路』を『X字路』とは言わないだろ？」

「『Y字路』があるじゃんか」

「それは『二叉路』だ」

「リュート、マサキくん。松平くんが困つてるわよ？」

右折禁止の路地に右折した車両を咎めるように、ツクシがクラクション代わりの警告を発して話を戻す。

「松平くん、すまない……で、君に聞きたいことがある」「何だ？ 原付免許の試験に出そつないとほ忘れっちまつたぞ」

それはそれで問題だ。

「交通じやないが、三本以上車両通行帯がある道路で、一段階右折禁止じやないとこりは一段階右折しろよ。……えつと、一昨日、カギを借りたのはキミか？」

「一昨日……？ あー……そうだけど……なんか関係あんのか？」

「いや、カギの貸出記録に載つてなかつたからね」

「こりは正樹の記憶通り。裏付けも出来たところで、次の話。

「で、今朝の登校順について、もう一度聞きたい」

「さつき言つたけど……えつと、まず一条くんが来て、松平くん、そして私……その後椎名くんと高梨くんがほとんど同時だつたよ

先ほどと大して変わらない証言。違つてゐるところは……。

「松平くん。関山さんが言つた順番で合つてるかい？」

龍人は隆幸に裏付けを求め、隆幸は首肯で応える。

「そうか……まあいいか。似たようなものだ」

期待や予想と少し違う返答だった、と言わんばかりのリアクション。

ツクシは龍人の様子に、何かを感じて……。

「リユート？ もしかして……」

「ああ。塗りつぶされて見えなかつた物が……見えた」

「……恥ずかしくない？」

龍人はツクシの発言を無視した。

「まず、この件は記事ではない。実際に発生した状況なので、新聞とは違う語り口で行きます。話す順番を考えず、単純に時系列で何が起きたか、俺の推測で話します。途中、事実に反する箇所があれば、口を挿んでください」

言い終わつた後、ゆっくり場の全員を見回す。特にリアクションを示さないので、龍人の発言を肯定したとみなし、先に進める。

「まず発端。椎名くんと高梨くんの、お互いが勝手気ままに自分の

作りたい物を作っていた……といつとひりだ

「……やっぱり、そうなの？」

名指されたうちの片方。意外にも無口で内気の雄一が口を開いた。

「そりだらうな。多分、この場にいるみんなも、この場にいないクラスの連中も……全員とは言わんが、文化祭でモニコメントを展示しようとしたのは、君たち一人が協力しあえば、良いものが出来上がるとの考え方だ」

龍人の考えは正しいようだ。少なくともこの場にいるメンバは異論を唱えない。まあ、クラスの中でも意識の高い生徒が集まっているので、当たり前だらうが。

「だが現実はどうだ？ 椎名くん。高梨くん。メインでやつてるお二人に訊くが、満足のいく出来かい？」

指名された二人は同時に俯く。……息は合っている。

「……図星かい？」

やはり二人そろつて首肯。

「他のみんなは？」

隆幸と夏希は答えない。

「オレは悪くはないかな。でも、氣に入つてもない。正直、白くなつてもガツカリしなかつたなあ」

正樹は自分の心情を、なかなか上手く表現したものだ。

「それがマサキの意見か。んで、関山さんはどうだい？ モニコメントが白く塗られる前、どう思つてたか……俺が一番訊きたいのは君の意見だよ」

無言。

「黙つていたつて解らないよ」

無言。

「本当は、今朝言つつもりだつたはずだ。『白く塗つたのは私です』

と

龍人が夏希に対し、問い合わせるような言葉を掛け始めた辺りから、

全員の視線は彼女に注がれていたが……それでも夏希に注目が集まつた。

「オイ！ 桜井！ 何犯人扱いしてんだよ！」

隆幸がわめくが、龍人は無視。語りかけられている夏希は未だに無言。

「昨日、キミは彼らのケンカを見て、計画を考えた。作業中にでも抜け出して、柔道場のカギを無記名で借りる。作業終了後の戸締まりの時に、柔道場と体育館のカギを、お互いキー・ホルダを入れ換えて、『体育館』のキー・ホルダがついた柔道場のカギを返却。こうして、手元に体育館のカギが残る」

夏希は相変わらず無言。“間違っている箇所があれば口を挿め”と言つてあるが、結局のところ、解らない。

「それで、夜にでもハケと白ペンキを持って忍び込む。作業が終わつたら、カギをかけて帰宅。で、終了」

ここで“待て”と口を挿んだのは、隆幸。

「結局忍び込むんだから、そのときにカギを盗んで、そのときにカギを返す方が、単純でいいんじゃない？」

「いや、それはムリ。考えてみてくれ。夜、基本的には、学校の全ての部屋が戸締まりされる。通常の教室は開いてるかもしれないが、職員室は校内のカギがあつたり、個人情報の宝庫。校内でもトップクラスに防犯意識が強い所だ」

「新聞部でもカギのコピー持つてないトコだもんねっ！」

ツクシが補足。

「ツクシの補足は知らなくても、夜中カギがかかっていることは容易に想像がつく。実際、昨日も先生が戸締まりをしていたのは、キミがさつき言つたことだろ？」「必死に夏希を庇おうとする隆幸でも、閉口するしかない。

「……というか、本当はキミも知ってるんだろう？」

「な……何をだよ……」

隆幸はあきらかな狼狽を見せ、視線もあちらこちらへと定まらない

い。

「今朝の一一番乗りはキミだら?」

「な……なんでそんなこと言えるんだよ。さつきのナツの説明、聞いてなかつたのかよ?」

「聞いてたさ。順番は『マサキ。松平くん。関山さん。椎名くん。高梨くん』だね。でも本当は、マサキは関山さんの後なんだよ」

「どうしてそんなことが解る?」

「オウ。オレも疑問だぞ。サクリュー早く説明しろ」

「黙つっていても説明するさ。マサキが今朝登校したとき、体育館には誰もいなかつた。そして昨日あつたハズの体育館のカギ……いや、体育館のキー・ホルダがついたカギがない。マサキが一番乗りだと有り得ない状況だ。となると、その前に誰かが『体育館のキー・ホルダのカギ』を持ち出さなければいけない。それが、キミだ

いつもの調子なら、何か言い返しそうなものが、隆幸は言い返さない。固まつた、という方がしつくりする。

「正確な流れを言つとこうだ。今朝、誰よりも早く来たキミは、それが体育館のカギではないと知らず、カギを持ち出す。貸出記録は、いつも通りつけないでね」

貸出記録の下りは蛇足かもしれないが、軽く牽制にはなるだろ?。「で、体育館を開けようとしたら、開かない。そのシーンを見た関山さんは驚いたハズだ。それで……関山さんは、キミに全てを語つた。だがキミは、口裏を合わせて誰かがやつたことにじょうとした

隆幸が口を開く前に、いや、それを制して、口を出した人物がいた。

「隆幸は悪くありません。私が一番悪いんです」

関山夏希が、塗装したこと認めた。

夏希が塗装したといふことで、雄一と文也が激昂するかと思つて

いた龍人だつたが、良い意味で予想は裏切られた。危険が及ばぬよう、密かに正樹を一人のそばに待機させていたが、取り越し苦労だつたようだ。

「……関山さんが……犯人だつたんだ……」

雄一が小さい声を更にミーマムにした咳きは、龍人の耳にもはつきりと聞こえた。

「椎名くん。俺は全てが見えてから、『犯人』という表現はしてないし、この件を『事件』と言つてない」

「なんで？」

「この件は、一年五組の作業メンバ全員が絡んでる。もし『犯人』を挙げろといふなら、全員が『犯人』だ」

龍人の宣言に、全員が驚き、説明を求める。夏希も、疑問符を顔に浮かべ、詳細を聞くとしているのが窺える。

「まあまあ、とりあえず最後まで説明するから、ちゃんと聞いていてくれ。多分、松平くんの提案で、外部犯に仕立てようとしたんだろうな。俺の想像では、『悪いのは椎名くんと高梨くんなのに、関山さんが一人で悪者になる必要はない』みたいなことを言つたんだろ？」

「……なんでそこまで解るんだよ……」

咳きではなく、もはやボヤキになつていてる。

「今朝からなのか、前からなのかは知らんが、キミは彼女を庇いすぎる。一緒に作業する仲間だから、ではないだろうな。昨日の椎名くんと高梨くんのケンカも、キミがそれとなく言つてきた。だから、彼女限定だつうと思つてね。そう考へると、そんなシナリオが自然に出てきたよ……つて合つてたんだ」

隆幸は“チクショウ”と毒づいたが、龍人は軽く聞き流した。

「で、当初は全員が揃つたあと、先生に頼んで開けてもらつつもりだつたんだろうな。いくらなんでも、生徒に貸し出すカギ以外に、教職員が管理してるカギがあるはず。それを頼りにするか……別の方法でも、とにかく全員揃つてから開けたかった。みんながモニユ

メントに注目してゐるときに、カギを捨てて後付けの密室を作るため
にね」

その場合、全員が証人にならなければならぬ。現場保全をして
いる側に全員がいないと、後付けの密室の可能性に気付く人間が出
てします。

「ところが、ここでマサキが来て、俺を呼んだ」

「お、ようやくオレが犯人の回だな」

「……嬉しそうだな」

「嬉しいぞ」

表情から察するに、文面通りの意味らしい。

「……で、あらうことか、新聞部がカギのコピーを持つていていう、想定外の事態が発生した」

一介の、それも正確には同好会扱い（新聞同好会だと、ただの新聞マニアな感じがしてイヤ……との理由で、通称だけでも新聞部にした）の団体に、校内の大半のカギを持たせておくなど、誰が想像出来よ。づ。

「ねえリユート。それがどう関係するの？」

ツクシは“新聞部がカギを持つていても、結局は体育館を開けるんだから関係ない”と言いたいのだろう。

「ああ、このこと自体は、そう重要じゃない。問題は、新聞部が関わったというところにある」

カギを貸したことで、繋がつていらないラインが、繋がつてしまつた。

「リユート……あんま恥ずかしいこと言わないでね……」

「安心しろ。『俺を呼んだことが最大の誤算だ』なんて、どじそのキザな名探偵みたいなことは言わん」

「言つてるぞ、サクリュー」

「……否定文に使つただけだろ。俺が言いたいのは、『外部の人間が関わって、話が広まるトマズイ』だ」

「……チト解らん。どうこうことだい？」

文也が聞き返す。

「おそらく、仮想の犯人、仮に『ケイスケ』と……」

「『X』ね」

ツクシの素早いツッコミに、言葉を詰まらせる龍人。軽く咳払い一つして、再開する。

「全てを仮想の犯人『X』がやつたこととして……もし、その『X』が他のクラスの人間だつたら？」

少し間を開けて、さらにもう少し間を開けても、誰も答えない。

「……高梨くん？」

「え？ 僕に訊いてたの？」

説明を求めて、自分はまつたく考えずに聞くだけ。これではCDでもかけていた方が有意義だ。

「えつと……なんか姑息だな。いない人に擦り付けるなんて」

「ああ姑息だね。戦争すると一時に支持率が上がるどつかの国みたいに、姑息な手段として『X』を作り上げた。文化祭が終わるまで気付かれなきゃいい……だが、ここで新聞部が来たらどうだ？記事にされたら、実態を伴つた『犯人』が見つかるまで、調査されるかも知れない。たとえ文化祭が終わってから真相が見えたとしても、そのときは『文化祭の話題作りのため』と言われるかも知れない」

まくしたてている訳ではないが、一気に言つたので、あまり意味が伝わっていないようだ。ツクシまでもが、表情に疑問符を浮かべている。

「……要するに、新聞部に限らず、一年五組以外の人間が居てはならなかつたのに、それを連れて来てしまつたのが、マサキがやつしたこと」

隆幸は、ため息をつく。

「マサがカギ借りに行つたときには、ヤベエって思つたんだよ」

それを聞き、龍人は“違うよ”と言つて、そして続けた。

「松平くん。多分、関山さんの最初の計画のままが一番良かつたん

だと思つ

「そういえば、関山さんの計画つて何？」

ツクシが口を挿む。

「……一切合切を説明して、仕切り直す……つてことだよな？」「夏希に向けて、言ひ。

「うん。』このままじやダメ……みんな、もつと全体のこと考えよう』……つて、言つつもりだつたの」

それが夏希の計画。いや、願い……メッセージ。

「松平くん。彼女の保身を最優先にしたのが間違いなんじやないか。彼女の計画なら、ちゃんと説明すりや問題は無かつたんだぜ？」

「……そうかも。余計なことしたかもしけねえな。『ゴメン、ナツ』『ううん。椎名くんと高梨くんが白くなつたモニコメント見て、そしてケンカを始めたから……その時にちゃんと説明できたのかは、今でも判らない」

結果的にはこれで良かつた。

龍人は“みんな頑張ろう”と、率先して作業を再開した雄一と文也を見て、そう思った。

もうお役御免だと、部室に戻ろうとした龍人を引き止める者がいた。

「サクリュー！」

一条正樹である。

「なんだ？ もういいだろ？」

不承不承振り返ると、正樹は頭を下げた。

「ゴメン。無理やり連れてきて……話ややこしくさせたのはオレだ」
いつになく真剣な表情。

「ま、予想出来ないからな。仕方ない。それに、今回はみんながみんな、それぞれがいい結果を生もうとしてなつたことだ。でもみんな少しづつ問題があつて……ただそれだけだよ」

自分が作るものに「そベストと、力を合わせること」をしなかつた雄
一と文也。

どんどん意味が解らないものになつていくモニコメントをリセッ
トするため、誰にも相談せず、強行によつて間違いを指摘しようと
した夏希。

夏希が悪者扱いされるのを避ける。ただそれだけのために、外部
犯を仕立て上げようとした隆幸。

さつさと力ギを開けて作業を始めようとした。自分達が作つてい
る物にイタズラをした犯人を探すため、新聞部を連れてきた正樹。
客観的に良いか悪いかはさて置き、どれもそれぞれが、それぞれ
のベストを目指したこと。

「それが一番悪いと、はつきりは言えない。

「ん……難しい話は勘弁してくれ。それはオレの係じゃない」

「ま、単純に絶対悪はそつそつ無いつてこつた。んじゃ、作業頑張
つてくれ」

と、きびすを返して部室に向かおうとする龍人だが、やはり再び
正樹が引き止め、結果三六〇度ターン。

「正義とか悪とかはもういいから、余つてる新聞くれ」

「……ゴメン、文脈がよく理解出来ない」

「じゃあ『余つてる新聞くれ』だけにする

「何故?」

「文脈にモンク付けたのはサクリューだろ」

「『何故』は『余つてる新聞くれ』だけに係る」

「なんだそういうことか。ほら、今二重にペンキ塗つてあるだろ?
厚くなつてるし、紙の張り直しからやろつてなつたんだ」

なるほど。モニコメントは木で型を組んで紙を張り、塗装する手
法で作つてゐるらしい。

「……俺とツクシが丹精込めて作つた新聞を、そんな風に使おうと
言つてゐのか?」

睨みつける龍人だが、正樹は全く動じない。

「うん。 そんな似合わない顔しないで、古新聞くれ」
龍人は表情を一転。笑顔に変える。

「ああ、予備分やミスプリント、合計すれば大量にある。いくらでもやるよ」

新しいからこそ新聞でありニュースである。つまり、いくら丹精を込めて作ったものでも、古いものは役に立たない。

そんなものでも、使い道があるのなら、欲している人間に渡せばいい。

古いものでも、新しいスタートに使えるのなら、断る理由など、どこにもない。

(後書き)

携帯電話で読むことは少々長い作品ですが、お読みいただき、ありがとうございます。

……なんとも季節外れな作品……師走も間近に夏休みって……。書き始めはその時期なんですがねえ……3ヶ月もかかってますよ。まあ、かけた時間が作品の良し悪しに比例するなんて全く思つてませんが。

……や、また書き始めるか。

最後までお付き合っていただき、ありがとうございます。

また、どんなことでも感想戴けますと、大変励みとなるので、ぜひ一筆と、お願い申し上げて……
またお会いできる日まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1938b/>

真っ白け

2010年10月8日15時05分発行